

中国と日本の間で

沖縄県立前原高等学校 二年

稲福 秀佳

私は、母の語学留学のために、六歳から十五歳まで中国へ留学していました。そのため、沖縄の歴史や基地問題について知る機会がほとんどなく、考えることもありませんでした。

最近、沖縄の基地問題が注目されています。テレビや新聞などで連日、県民の反対運動が報道され、人々の平和への強い思いが伝わってきます。私は多くの沖縄県民が同じ思いを持ち、行動する団結力に感動しました。沖縄の人々が今、新たに心を一つにしているのは、沖縄戦という悲惨な体験が忘れられないからだではありません。戦後六十五年経った現在でも基地が存在することで、引き起こされている事件や事故が、後を絶たず、命がおびやかされている状況だからだと思います。

沖縄県民である私が、中国で生活していた頃、中国の高齢者の方々が語り継いだ戦争の話や教科書による学校教育では、日本人はいつも加害者として見られていました。それは私にとってはとても辛い体験でした。

ある日、学校で日清戦争についての映写会が開かれました。最初は、私も同級生と一緒に日本軍が中国で行った残酷な行為の映像を見ていました。映像が進むにつれて、同級生たちがじろじろと私のことを見始めました。そして、ある同級生が「日本人がやったんだ」とつぶやくと、それが広がり、同級生たちが口々に、私に対して「こいつは日本人なんだ」「日本人が中国人を殺した」と、ざわめき始めました。私は何とも言えない気持ちになり、気がついたら、その場にいられなくなって、泣きながら逃げるように帰りました。帰宅後、母は、「あなたのせいではないから、気にしなくてもいいんだよ」と慰めてくれましたが、私は、しばらくの間、学校へ行くことができませんでした。その後を知ったことですが、中国では「反日運動」の一環として、このような映写会を小・中学校で度々催したり、道路や公共施設で戦争写真展を開いているようです。その活動によって、日本人から受けた過去の屈辱をわすれまいとしているようでした。

私は、中国人の同級生から、戦争を反対する強い気持ちを感じたことはあまりありませんでした。中国には戦争をする前提で軍隊があります。そして、中学生・高校生は一週間、大学生は、一カ月の軍事訓練が義務付けられています。私も中学校に入学する前、一週間の軍事訓練に参加しました。基地に宿泊し、主に行進や団体行動の訓練を積みました。朝六時に起床し、行進の訓練が一日中続きます。訓練後、シャワーの時間が三分間しかなく、私はシャワーに入ることを諦めて、一週間過ごしました。自分の自由な時間はなく、集団行動で束縛されるここが、一番辛かったです。私は中国の軍隊の一部分を体験できたと思います。このような軍事訓練が義務づけら

れている環境の中では、中国の学生は、反戦平和という気持ちを強く持つことはできないだろう。むしろ国のために戦うという気持ちの方が強いだろうと思いました。

私は、日本人として中国で暮らして、何かある度に、戦争の加害者である日本人と見られて悲しかったです。確かに、歴史上では、日本人が中国人に残酷な行為をしてきたことは事実です。しかし、どうして私が日本人だからと、多くの中国人に嫌われ、責められるというひどい扱いをされなければならぬのか分かりません。今でも私の心の中には怒りとむなしさが残っています。それほど時間がたっても時代が進んでも、消える事のない憎しみや怒り、そして悲しみ。どれほど世代が替わっても、それらの負の感情は消えることなく受け継がれていき、再び新たな戦争を起す火種となっています。結局、戦争は、加害者にも被害者にも苦しみを与え続け、未来への希望まで奪っているのではないのでしょうか。

私はもう、苦しむたくはありません。そして、誰かを苦しめ続けたくはありません。沖繩では、戦争を経験した人々が、本当に「戦争はもう嫌だ、もう子供たちに同じ苦しみを味あわせたくない」と、心から叫び、その心がみんなに伝わって、平和を願う大きな輪になっているのだと思います。

私はまだ子供で、戦争について多くは知りません。しかし、中国で体験した事を、周りの友人や大人達に伝えていきたいと思います。私は将来通訳をめざしています。その仕事を通して、世界中の人々に、戦争の残酷さを訴え、平和の尊さを伝えていきたいと思っています。